

学びたいと願う人が 学校生活を続けるために

～今、学ぶことと、将来を考えながら～

思春期の子どもたち ——スクールソーシャルワーカーとしての出会い

私は、ある中学校でスクールソーシャルワーカーとして仕事をしています。スクールソーシャルワーカーは、子どもたちが直面するさまざまな課題を解決するために、子どもたちの思いに寄り添いながら、学校（教育機関）、家族、地域などをつなぎ、環境を調整することを通して、子どもたちの生活や成長をサポートしています。

思春期や青年期は、体や心が大きく成長していく時期で、そのために多感になることや葛藤が起こりやすくなることがあるといわれます。そのような時期にある子どもたちが、自分自身のこと、だれかとの関係、将来のことなどについて悩み、迷いながらも、さまざまな経験を通して成長・発達していくためには、安心できる環境が必要です。そのために学校や教育機関は大切な存在となっています。子どもたちが安心して成長していくために、周囲はどのようなことを大切に考えればよいのか、学校や教育機関はどのような役割を担うことが望まれるのか、そんなことを日々考えています。

とはいっても、話をしに来てくれるのは先生たちや家族が中心です。相談の内容はさまざまです。私がかかわった、はるきくん（中学校3年生）のことについて、少しお話をしてみます。

事例**発病についての受け止め
——しんどいのはだれだろう？**

はるきくんは、中学2年生の秋ごろから学校を休むようになりました。人の視線が気になって登校できなくなったのです。食事や睡眠もとれず、心も体もエネルギーが落ちていたようです。お母さんははるきくんが学校に行かなくなった理由もわからず、最初のころは「なまけているんじゃないか、そのうち行くようになるだろう」と考えていたようでした。しかし、事態が改善しないため、担任の平田先生と一緒に私のところに相談にみえました。

お母さんは、はるきくんがうつ状態で精神科病院に入院していることを涙ながらに話してくれました。平田先生は、はるきくんが精神的な症状があって入院していることを初めて知り、驚いた表情で「その状態ならこれまでどおり学校生活を続けるのは難しいかもしれませんね。私もどんなふうに接したらいいかわからないし、正直自信がありません……」と話されました。

✳ 症状は落ち着き、ふたたび学校へ！

私は、はるきくん自身から今の状態やこれからどうしていきたいかを聞きたいと思い、お見舞いに行きました。はるきくんは少しずつ気持ちを話してくれるようになりました。はるきくんが退院するとき、お母さんは「不安でしかたがない」とこぼされました。私からお母さんに「不安な気持ちはお察しします。はるきくんが安心して暮らしていけるように、一緒に考えていきましょう」と伝えました。

はるきくんが退院したので、私は家をたずね、はるきくんと話をしました。はるきくんは、「高校へは進学したいけど、長い間、学校に行っていなかったので友達や先生が自分のことをどう思っているか……。勉強もついていけないか心配だ」と話してくれました。私は担任の平田先生、校長先生、保健室の先生、生徒指導の先生を交えて話し合いの機会をもちました。

先生たちからは「そんなにしんどくては高校進学のための勉強もできないのでは」「はるきくんの病気のことをほかの生徒にどう伝えたらいいのか」「特別な扱いをすることで、ほかの生徒に影響がでるのではないか」「何かあったときにどう対応すればいいのか不安」などの意見が聞かれました。私は先生たちと相談しながら、はるきくんが学校生活を続けるために学校や周囲がどのように応えていけばいいか、何をすればいいか、どうサポートすればいいか、はるきくんの将来も視野に入れつつ、次のようなことを行っていました。

✳ 子どもたちの思いを受け止め、可能性をひらく

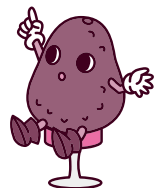
まず、はるきくんの思いをていねいに聞き、何事も確かめながら進めていくこと、これは私が担当しました。そして、先生たちには思春期の精神保健や精神科の病気についての理解を深めてもらうために、児童相談所の嘱託医（児童精神科医）からレクチャーを受けたり、地域の作業所に体験実習に行ったりしてもらいました。はるきくんが教室にいることがしんどくなったときは、保健室の先生と校長先生が個別にフォローしてくれることになりました。担任の平田先生は、はるきくんの進路や勉強のことを中心に誠実に対応してくれました。はるきくんの幼なじみは、登校するときにはるきくんを誘ったり、家に遊びに行ったりするようになりました。また、はるきくんが通院している病院の精神保健福祉士が、医療機関の窓口としてはるきくんのサポートをしてくれました。はるきくんはときどき休むことはありましたが、笑顔で卒業式を迎えました。

はるきくんへのサポートを通じて、先生たちが感じたことや考えたことを、年度末の職員会議で話してもらうと、次のようなことがあがりました。

- *精神科の病気について、受けとめ方が変わった。
- *目に見えにくい病気だからこそ、まわりの配慮が大切だとわかった。
- *病気や障害を理由に、何かを制限していないか、子どもたちの可能性を閉じてしまっていないか、これからは自分自身でも確認していきたい。
- *役割や責任を分け合うことで、私たち教員も子どもたちにゆとりをもって、安心してかかわれるということがわかった。
- *子どもたちの学校以外での様子を踏まえて接していきたいし、卒業後の進路や社会参加のありようも視野に入れてかかわりたい。
- *学校や社会で、子どもたちが孤立しない状況をつくっていきたい。
- *それぞれの子どもの思い、状況を理解し、取り巻くさまざまな状況にしっかりと向き合い、いろいろな環境を創造していきたい。
- *学校も、このような課題が生じたときに学校だけで抱え込まず、地域と連携していきたい。

このように、はるきくんのことを一緒に考えてきたことが、病気や障害の理解につながり、他機関や他職種ともつながり、子どもたちの成長をサポートするしくみづくりの必要性を地域社会の課題としてとらえることにつながっていきました。

学校の内外を問わずたくさんの人をつなぎ、協力を得ながら、これから出会う一人ひとりの子どもたちに、「安心してこの学校においでよ」といえる学校をつくっていけるような、そんな気がしています。



子どもたちのいろいろな状況に応える場へ

1989年に国連で採択された「子どもの権利条約」第2条では、心や体に障害がある、ないにかかわらず、いかなる差別もなく、この条約に定められた権利が尊重され保障されると定められています。そして第23条では、障害のある子どもたちの特別の必要性を認め、社会への統合や個人の発達の可能性がひらかれる方法で、教育などの機会を実質的に利用できることが保障されています。さらに2006年に国連で採択された「障害者の権利条約」第23条では、障害がある子どもがほかの子どもと平等であり、最善の利益が考慮され、権利が実現できるように個別の状況に応じたサポートが受けられると明記されています。

病気にかかったり、「障害」を受けたときにいちばんつらくてしんどいのは、本人でしょう。同時に、周囲もどのように接していいのかわからず不安になり困惑し、適切な対応ができず、つらい状況を後押しすることがあります。知らないゆえに過度な配慮をしたり、遠ざけたり、また、ほかの子どもとまったく同じ対応をすることが、本人や家族にとっては「排除」や「拒否」と映り、結果として不利益が生じることもあるでしょう。

大切なのは、教育機関において教育を実質的に平等に保障すること、学校場面を越えて子どもたちの生活全体を考え、卒業後の人生や生活も視野に入れて子どもたちとかわかることだと感じます。そして、障害のある、ないにかかわらず、多様な生活課題があるために、教育を受け、成長や発達をしていくことが難しい状況にある子どもたちのサポートを考えることが大切なのではないでしょうか。教育機関を子どもたちのいろいろな状況に応える場にしていくために、教育における実質的な平等をはかるために、どうすればいいか、一緒に考えませんか。

その後、自信を持った平田先生は……



※SSW…スクールソーシャルワーカー。

このように、病名は同じでも、症状は一人ひとり違います。イメージや思い込みにとらわれず、それぞれの子どもとじっくりと向き合い、柔軟に対応したいものです。子どもたちを支える人たちの支え合いもまた、大切かもしれません。